

拷問用特殊調整ウエルスの運用試験第〇〇回——…

試験場の中央では今日も彼らの獲物としてゼファーが磔になっていた。形態が崩壊し肉塊と化して蠢くウエルス群に四肢を呑み込まれている。

前垂一枚で隠れるような肉付きの薄い彼女の肢体だが度重なる凌辱調教の繰り返しで布の下の肉体には触れれば弾け飛ぶほどの性感が渦巻いていた。



足元に群がる無数の肉袋の口から噴き出す催淫ミストが
ゼファアの周辺に充満し彼女の肌を侵していく。

沈静化していた己の劣情を呼び覚まされ
身体の芯から徐々に湧き上がってくる甘く熱い痺れを抑え込むため
彼女は齒を食いしばり、身を振って堪えている。





性感の昂りに耐えるゼファーを嘲笑うかのよう
に背後から伸びてきた無数の触手が追加の催淫液を身体に塗りたくっていく。

湿り気を帯び、肌にくっつきたりと貼りついた布地がゼファーの性感神経に狂おしいほどの焦燥感を齎していた。



潜り込んだ細長い触手が何本も布下で蠢き
既に尖り始めているゼファアの雌突起を弄りまわしていた。

両の乳首をとぐろを巻きながら上下左右に撫で転がし
包皮に潜り込んだ細触手の先端は中の真珠を器用に剥きあげる。

四肢を封じられたゼファアは昂った己の泣き所を為す術なく可愛がられ
全身を何度も震わしながら次々と生まれる絶頂の波をひたすら耐え忍んでいた。



触手により前垂の裾が股下を潜り後ろに引っ張られて布地が股間に食い込む。敏感な突起が擦られる刺激にゼファアは何度もくぐもった声を漏らしていた。湿った布がより彼女の肌に密着し、艶めかしく発情した肉体が透けて見える。

薄布を押し上げて自己主張する突起部を触手が細かい動きで弄り回す。
前垂が密着して固定され身動きのとれない尖った先端部を容赦なく弾いていく。

敏感極まった勃起粒から生まれる強烈な快感が彼女の視界を白く染め
ゼファーは断続的な連続アクメの爆発にひたすら悶えていた。



足元から現れた異形の物体を見てゼファアは息を呑んだ。

ヒトのどの部位をどう改造すればこうなるのか

丸鋸のような形状をした肉塊が彼女の股間に近づいていく。

必死に逃れようとするも四肢が根元まで埋まった状態では身動きすらままならない。



唸りをあげて回る周縁部が突き出した恥丘に触れた瞬間——、
ゼファアは雄叫びのような悲鳴をあげて顎を跳ね上げた。

無数の粒々が彼女の尖った勃起粒を弾き、擦り上げていく。

絶え間なく脳髓に叩き込まれる暴力的な快感に
ゼファアはイキながらただ叫び狂うほかない。

おおお



丸鋸は逆回転を始めながら股間をなぞりあげる。

今度は恥丘に埋め込む勢いで陰核の頭を次々と叩かれ
突如反転した強烈な感覚による強制的な絶頂により
ゼファーは目を剥きながらひたすらにイキ狂った。



——数十分間、熾烈な丸鋸責めを受けたゼファーは
ようやく解放されるも酷いイキ疲れで息も絶え絶えになっていた。


執拗な研磨愛撫をくらった彼女の陰核はすっかり肥大し
前垂を押し上げてその卑猥な形状を誇示している。



四肢を固められて反り返る
ゼファアの肉体の前面にワーム触手が群がる。

開いた口内には内部にびっしりと生える絨毛が蠢き
彼女の性感昂り尖り勃った雌突起を貪ろうと狙っていた。





ワーム触手は両乳首と陰核に喰らいつくと派手な音を立てて
呑み込んだ勃起粒をしゃぶり始めた。

催淫液と愛撫で昂りきった性感神経の塊を容赦なく蹂躪され
ゼファーは僅かな抵抗もできず強制的に絶頂に打ち上げられる。

布越しとはいえ雌突起を無数の棘で擦り潰される快感は彼女の許容レベルを遥かに超えていた。

ゼファアは激しく呻きながら鬼気迫る形相でイキ狂う。

触手の口内で咀嚼されグチャグチャになる感触と水音が絶頂の嵐で荒れ狂うゼファアの頭蓋内で乱反射し快感のポリュウムを否応なしに引き上げていった。



—その後、触手によって前垂が引き千切られ、剥き出しになった両乳首と陰核は更に悲惨な凌辱に晒された。

ワーム触手は呑み込んだそれを無数の棘で固定し引き伸ばした状態で自身全体を激しく伸縮させて何度も扱きあげる。

長時間にわたる絶頂漬けで既に正気が振り切れていたゼファアは触手の動きに合わせて痙攣しながらただ濁った喘ぎ声を漏らし続けていた。



ゼファアーは長時間にわたり失神と覚醒を何度も繰り返しながらイキ続け
体力の限界を迎えて静かになった頃によく突起責めから解放された。

彼女の顔からは完全に意思の光が消え失せ
虚ろな瞳で宙を見つめながら疲労困憊に項垂れている。

久方ぶりに外気に露わになった三つの突起は
見るも無残に肥大し反り返ったまま絶頂の余韻に震えていた。



股の下からグロテスクで凶悪な形状をした触手が伸びてくる。

催淫液で濡れた先端が
ゼファアの蜜壺の入口に近づいていくが
意識朦朧な彼女はまるで気付かない。



触手は愛液滴る膣穴に難なく潜り込むと
勢いよくその最奥を叩いた。

はらわたに響き渡る衝撃が
強烈な快感をともなって背筋を駆け上り
ゼファアの脳髄に容赦なく叩きこまれる。

正気に引き戻されたと同時に限界突破したアクメの熱に晒され
彼女の意識は再び絶頂地獄に呑み込まれた。



突き入れの衝撃で中から押し出されて尖りきった陰核が
先程の丸鋸に磨り潰される。

異常に感度を高められた性感神経の塊を内外から揉みくちやにされ
発生した致死的な快感の刃がゼファーの正気を切り刻んだ。



再び体力切れで反応が失せると
ようやく触手の責めが途切れた。

ゼファアの意識は
完全に絶頂の彼方に吹き飛ばされたが
肉体は未だに触手の蠢きに反応し
細かく震え続けている。



——凌辱の宴はここからが本番である。

絶頂の炎で十分に燻され、グズグズになった肉体にウエルスが喰らいついた。体液を媒介にして獲物の生気が快感を伴い吸い上げられていく。

激しい脱力感と快感が身体中を駆け巡りゼファーは正体を失くしたままイキ乱れる。



ウェルスはゼファアの全身至るところに舌と指を這わせ
絶頂に悶え狂う彼女の精神を快感ごと啜り上げていった。

悪目立ちする勃起した乳首は当然のようにしゃぶり扱かれ
腹部から生えた触手が尖った陰核を扱き潰していく。

生きたまま心と体を喰われるような感覚に
ゼファアは狂ったように暴れながら何度も果て続ける。

大勢のウェルスが群がるが、ゼファアの小さな身体では
彼等を同時に満足させることはできない。

露出した肌はたちまちウェルスの舌と触手で埋まり
全身のあらゆる突起や穴は奪い合うように貪られる

彼女に齎される快感も際限なく膨れ上がり
喘ぎ声も痙攣も常軌を逸した異常なものに変わっていった



しびれを切らしたウエルズ達は
ゼファーを肉塊から引っこ抜いた。

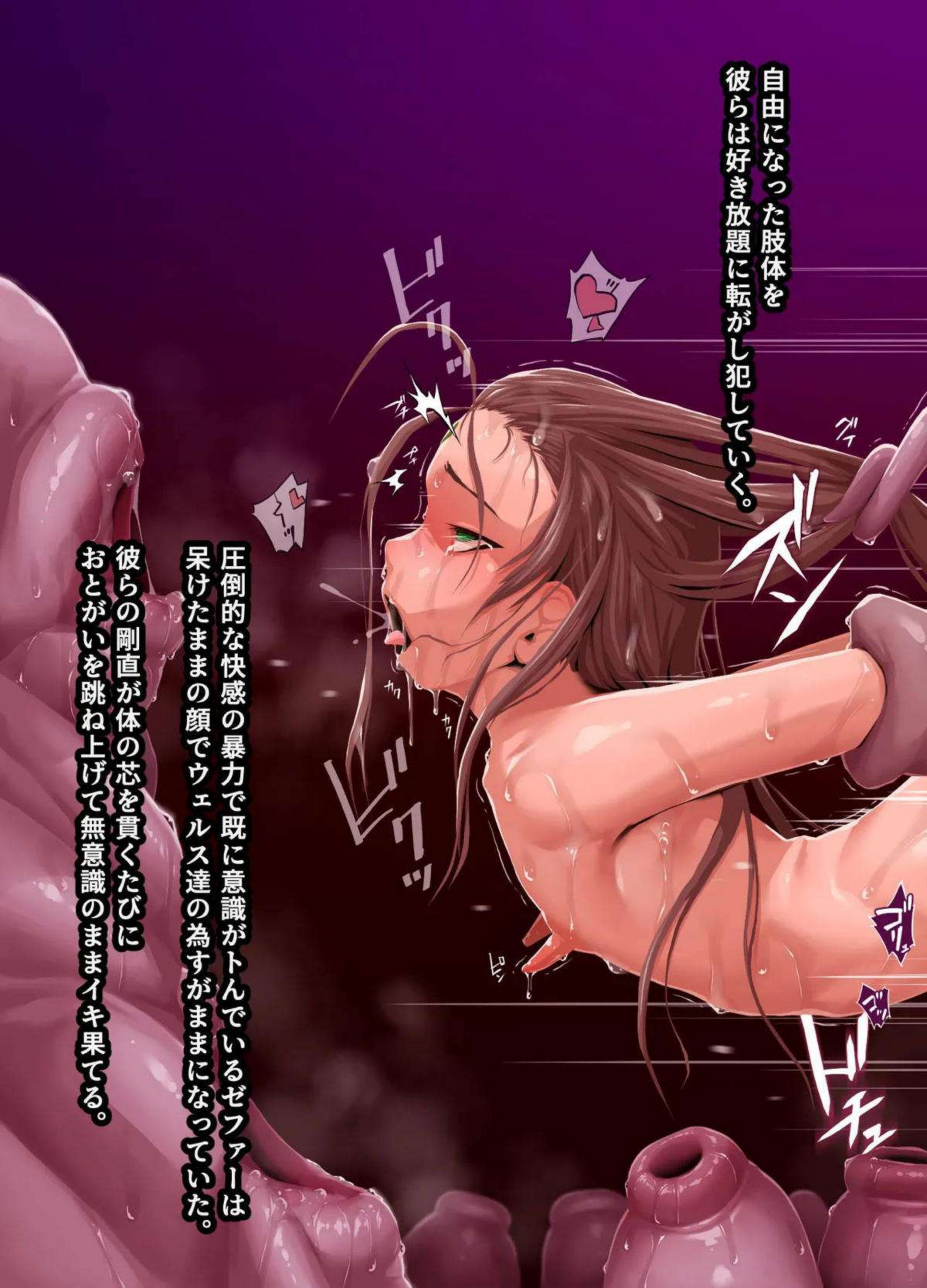
長時間にわたり媚薬漬けになっていた四肢は
それ自体が新たな性感帯と化して
撫でられるだけで凄まじい快感を生み出す。

ズルズル



自由になった肢体を
彼らは好き放題に転がし犯していく。

圧倒的な快感の暴力で既に意識がとんでいるゼファアは
呆けたままの顔でウェルス達の為すがままになっていた。
彼らの剛直が体の芯を貫くたびに
おとがいを跳ね上げて無意識のままイキ果てる。



ゼファアはウエルス群れの中に
ゴミのように放り投げられた。

たちまち彼女に大量のウエルスが殺到し姿が見えなくなる。

蠢く肉塊の中から激しい水音と僅かな呻き声だけが漏れていた。





——ウエルス達はイキ殺さんとする勢いで
ゼファアの全身をひたすら貪り尽くしていく

ク
ク
ク

ガ
ガ
ガ

ア
ア
ア

ク
ク
ク

ム
ム
ム

ク
ク
ク

ク
ク
ク

ク
ク
ク

ク
ク
ク

ク
ク
ク

ク
ク
ク

ク
ク
ク

数時間後――

心身ともに吸い尽くされ反応を失くした後も
未だにゼファーはその肉体を啜られ続けていた。

ウェルス達は完全に獲物の味がしなくなるまで
捕食行動を止めはしない。



経過を観察していた研究員たちは

力尽きる寸前で彼女を回収するつもりだったようだが

一晩経って先にウェルス達が満足して沈静化してしまった。

居座った触手が肉体を啄んでも彼女は死んだように無反応だが
ゼファアの命の灯はまだ途切れず僅かに残っている。

この後、リアクター培養槽で治療と調整を施されれば
問題なく次の実験にも使われるだろう。





あま

あま

あま

あま

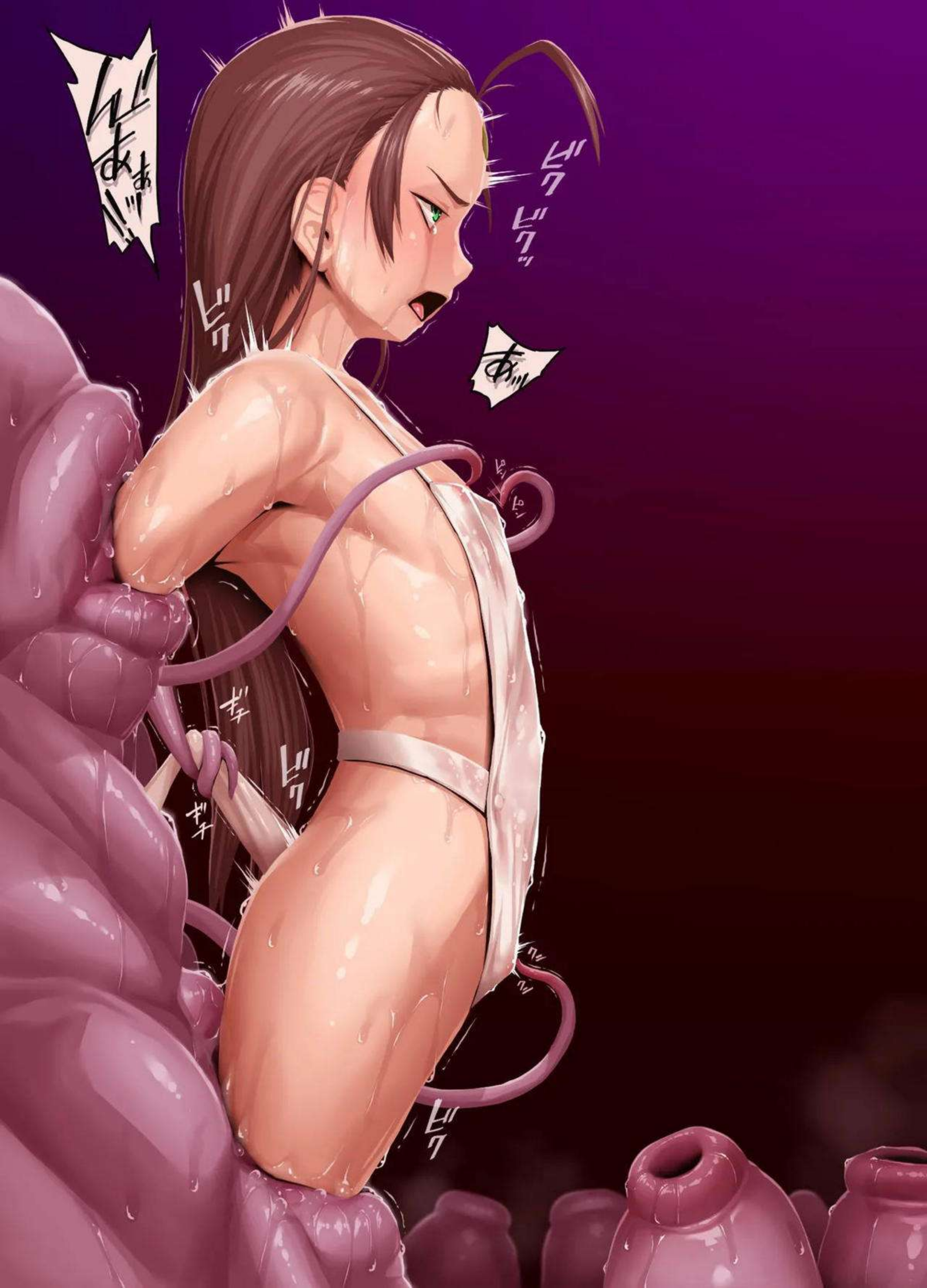
!











クククククク

クククククク

クククククク

クククククク

クククククク

クククククク

クククククク

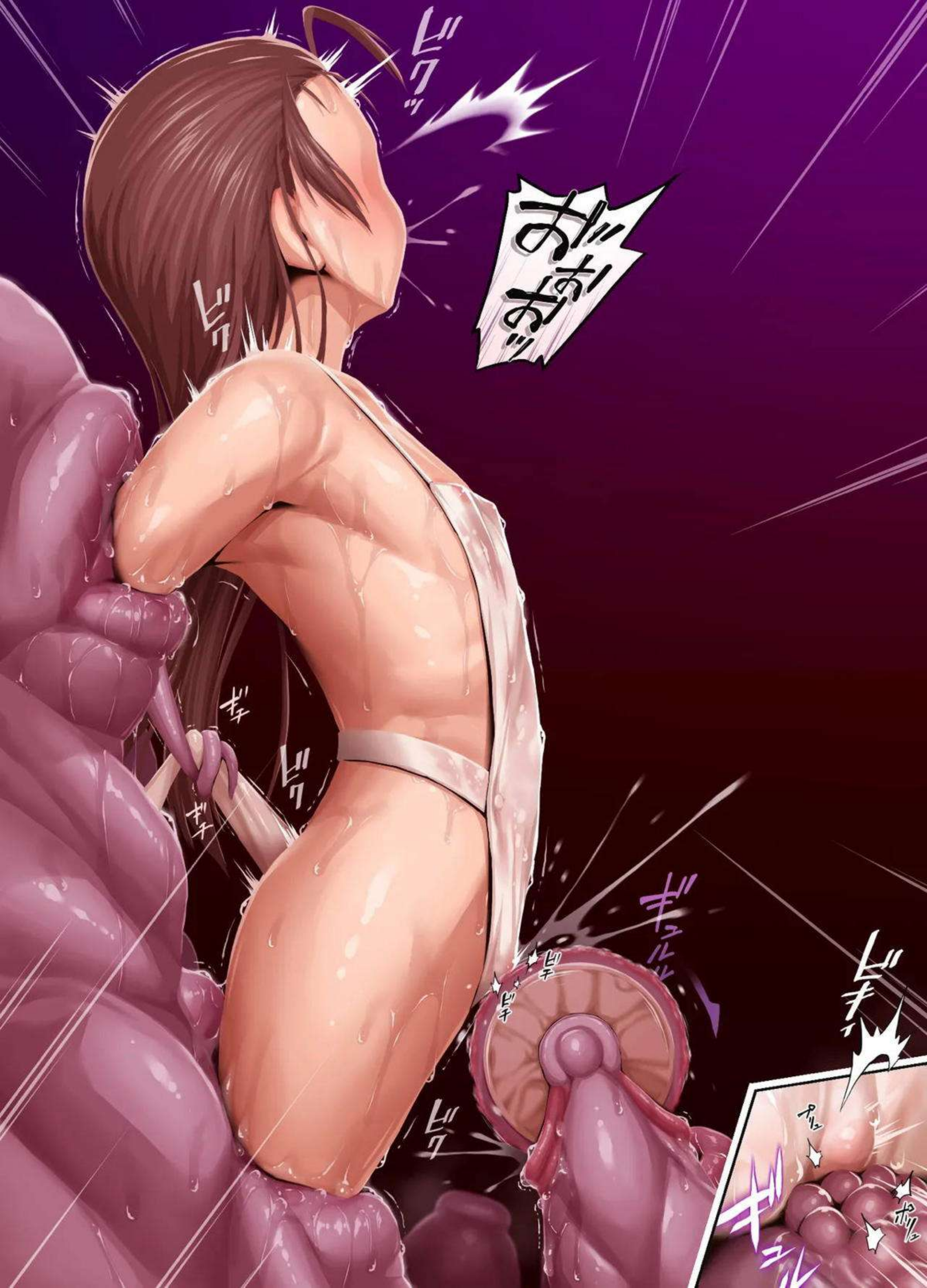
クククククク



グッ

グッ

グッ



おっぱい

ゴク

ゴク

ゴク

ゴク

ゴク

ゴク

ゴク

ゴク

ゴク

ゴク

ゴク

ゴク









ゴク

グッ
グッ
グッ

グッ

グッ

グッ

グッ

グッ

グッ

グッ















ドク
ドクドク

ドク

ドク
ドク

ドク
ドク

ドク
ドク

ドク
ドク

ドク
ドク

ドク
ドク

ドク





アハ

アハ

アハ

アハ

アハ

アハ...



ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

ジュルル

ガッ

ガッ

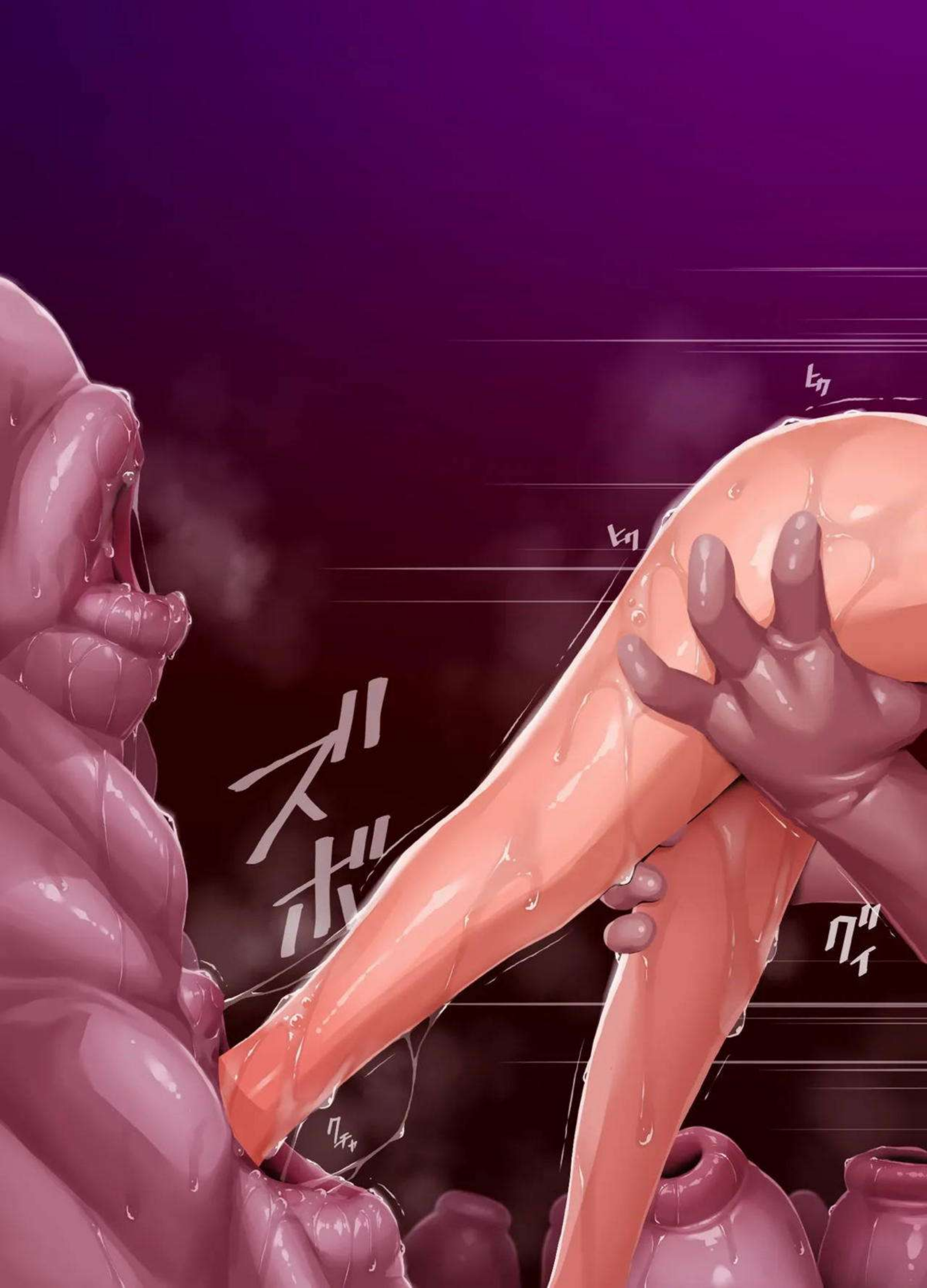
ガッ

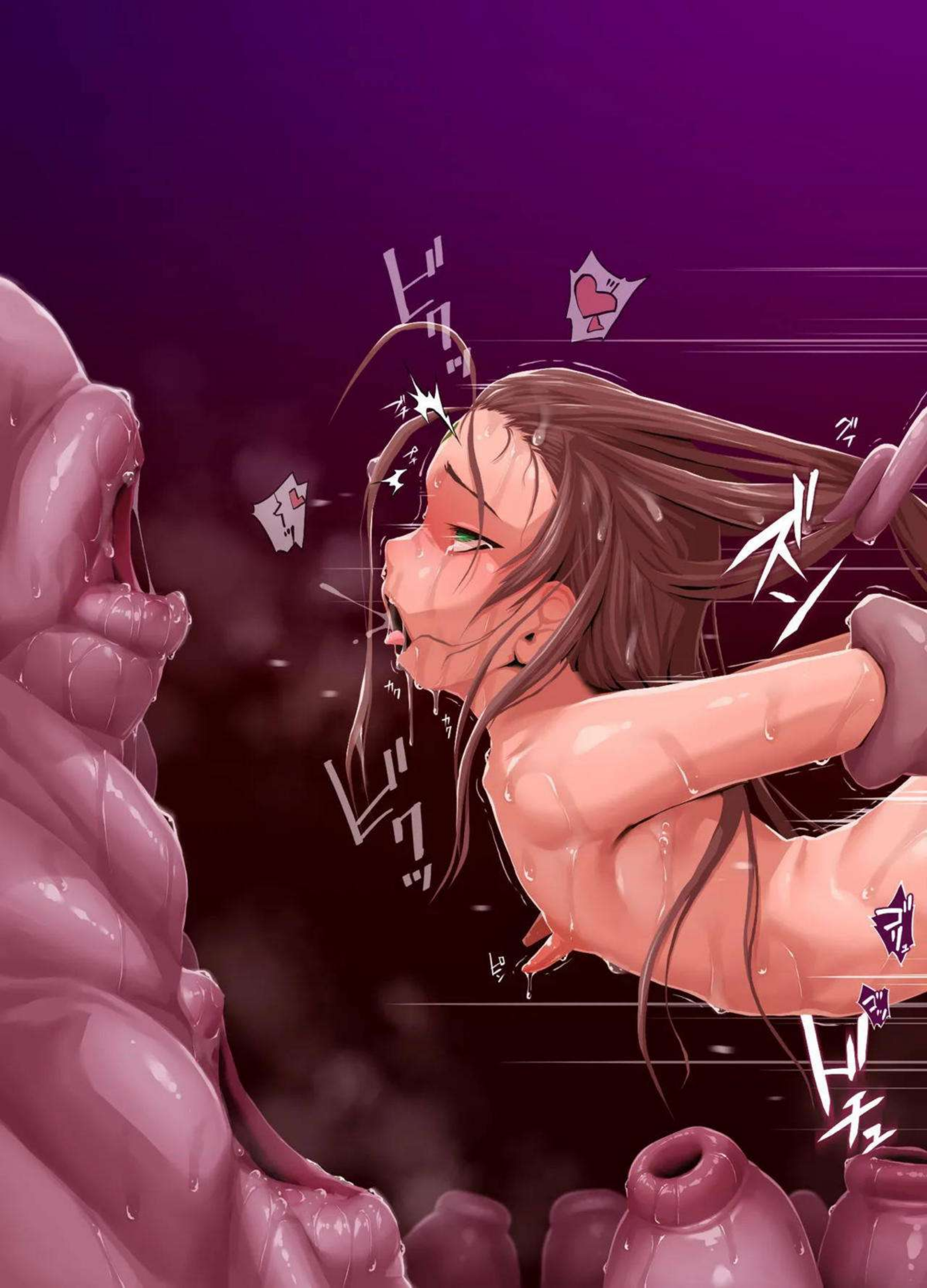
ガッ

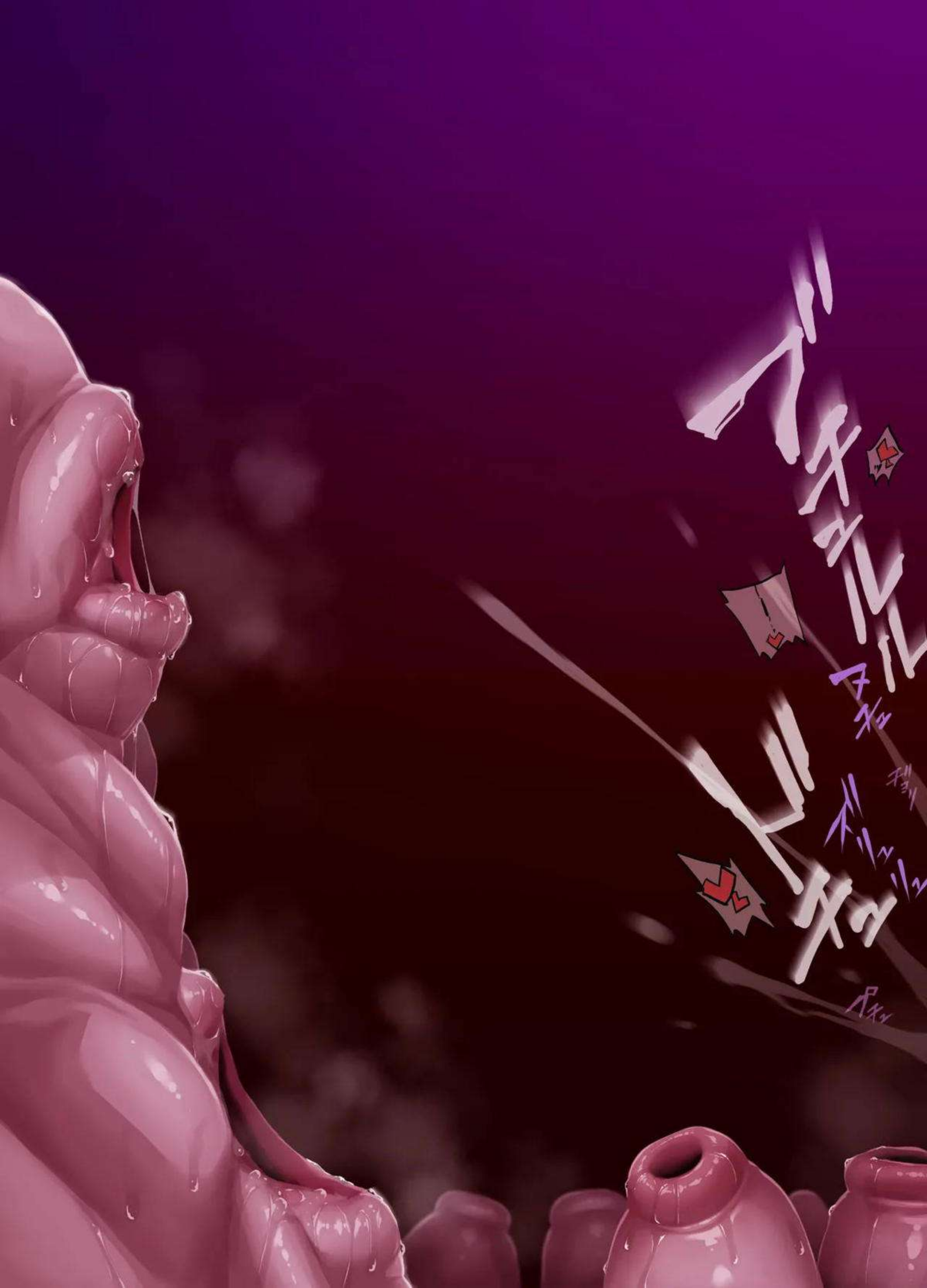
ガッ













ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ



おろ

おろ

おろ

おろ

おろ

おろ

おろ

